

す
き
だ
っ
た
ん
で
す
、
あ
な
た
た
ち
が
。

青白く輝く満月が、ゆっくりと沈んでいく。夜半過ぎとは言え、熊本城城下は静まりかえっていた。人の気配はどこにもなく、世界そのものが闇に包まれたかのようなだった。

高山右近は血に濡れた己が両手を凝視した。

次第に震えが沸いてくる。つま先、指、手のひらと、己が意思に関係なく震え、呼吸が大きく乱れる。そして、その手の向こう側に倒れている人の形に焦点が合うと、一層恐怖に顔が引きつった。

「……与一郎」

闇の中に、うずくまるようにして人が倒れている。着ているものは襦袢ぼろに等しく、髻がほどけ、まるで落ち武者そのものだ。垢と埃に汚れた肌は肉が落ちて、げっそりとやつれている。酷い臭いだった。どれほどの間、このような姿で彷徨い、過ごしていたのだろうか。

血だまりの中にいる友の名を呼んだ。何度も呼んだ。そのたびに、己の両目から、止めどなく涙があふれてくる。

これは痛みか。悲しみか。

「与一郎……なにゆえ」